緯錦にみられる文様構成の変遷
―遼代の花鳥文様を中心に―

福本　有寿子(関西学院大学)

多彩な文様表現を可能にする絹織物の錦は、時代によって織技を発展させながらさまざまな文様を展開した。中国の漢代から唐代の錦、あるいはわが国の奈良時代の錦については、旧西域地方からの出土品や正倉院宝物を主とした先行研究が多くなされてきた。しかし、9世紀以降の錦については、残存例が少なくこれまで十分な研究がおこなわれてきたとは言い難い。従来の研究では、わが国の平安時代にみられる緯錦は、中国の染織技術の受容と模倣から脱却し、独自の技法を確立し、国風化による文様表現を示すものと考えられてきた。しかし、近年の中国における発掘報告によれば、平安時代の緯錦と同じ組織の緯錦が遼代の墳墓などから出土しており、また中国出土の緯錦とわが国伝来の緯錦の文様の類似も指摘されている。このことから現存する平安時代の緯錦の多くが舶来品であると考えられるようになった。本発表では、９世紀から１２世紀にかけて緯錦の文様がどのように変遷したのかについて、日本の伝世品と中国出土品から考察することを目的とする。

これまでに発表者は、唐・遼代および奈良・平安時代の緯錦には４つの文様配置パターンがあることを指摘した。すなわち、①丸文様の主文に菱形の副文をおいた構成、②丸文様の主文に、その間を埋める連続文様の構成、③主文と副文の区別がみられない花唐草文様、④菱形の枠で囲った主文と菱形の副文による構成である。以上の４パターンに分類し、鳥文様と花唐草文様を中心に考察を行なった結果、①→②→③の順に文様構成が出現することを明らかにした。しかし文様構成④が成立する過程は不明のままであった。

本発表では、従来の研究でふれられていない新資料《花鳥文繻子地錦》を取り上げて考察を行ない、錦の文様構成が①から②と④へ分化し、最終的に③の構成が出現すること、さらに次の時代に見られるようになる丸文様のみの文様構成（⑤とする）に発展してゆくことを論証する。あわせて、西域から受容した「葡萄唐草に咋鳥文様」が７世紀から１１世紀にかけて中国における花唐草文様へどのように影響を与えたのか、染織品・工芸品・絵画に表された文様変遷の過程を辿った。その結果、従来「牡丹唐草」と呼ばれることの多かった花唐草文様は、牡丹文様のみをあらわすものではなく、蓮や睡蓮など複数の花に葡萄の葉の唐草を組み合わせた文様が含まれていることが判明した。この「葡萄唐草に咋鳥文様」から「花文様に葡萄の葉唐草文様」への変遷は、それぞれの花に適した葉をもつ花唐草文様の出現、ひいては南宋代にみられる牡丹唐草文様の流行に繋がると考えられる。この花と葉の関係から緯錦の文様をみても、①→②・④→③・⑤という順序で変遷すると結論づけることができる。以上のように、遼代の花鳥文様の緯錦を中心に文様構成の変遷について考察を行いたい。